

令和 3 年度 学校評価報告書（総表）

1 学校の概要			
学校名	筑波大学附属坂戸高等学校	校長名	田村 憲司
幼児・児童・生徒数（R4.3.1現在）	463	学級数	12
2 教育目標等			
① 学校教育目標	<p>複雑で予測の難しい社会の変化を前向きにとらえ、多様な他者と協働して新しい未来の姿を構想し実現していく人材となるために必要となる資質・能力を、総合的・体験的・実践的な教育を通して育成する。（「Engage today. Empower tomorrow.」）</p>		
② 学校経営方針	<ul style="list-style-type: none"> ・総合学科パイロット校としての使命を果たすため、社会の要請に即した教育のあり方を研究し実践する。WWL事業の拠点校としての役割を果たす。 ・新型コロナウイルス感染症対策を進め、学校教育を安全に運営できるよう努める。 ・受験者数を増加させるため、IB教育などに理解のある海外在留生に対するプロモーション活動により受験者層の新規開拓を行う。 ・国際バカロレア日本語ディプロマプログラムを円滑に運用するため、予算及び人的資源の確保に努める。 ・来年度実施予定の国際バカロレア日本語ディプロマプログラムのIBO査察に向けて準備を進める。 ・将来構想を受けて生じる諸課題に対応する。 ・学校の目標を教職員全員が理解し、組織体として行動できる学校を目指す。 ・教職員の研修の機会を確保し自らの専門性を高めようとする雰囲気醸成に努める。 ・科研費など外部資金の申請を増加させる。 ・働きやすい職場環境を目指す。 ・教職員ひとり一人の勤務カレンダーを作成し、勤務の適正化を図る。 		
③ 重点目標	<ul style="list-style-type: none"> ・WWL事業拠点校としての役割を果たす。 ・新型コロナウイルス感染症対策を進める。 ・入学志願者を増加させる。 ・持続的なIB運営ができる体制をつくる。 ・将来構想に対応する。 ・主体的な研修・研究を促す。 ・働きやすい職場環境づくりを目指す。 ・勤務カレンダーを作成し、適切な勤務管理を進める。 		
④ 前年度（令和2年度）の成果と課題	<p>新型コロナウイルス感染症の拡大によりWWL事業で予定したフィールドワークはほとんど実施できなかった。一方で、国際シンポジウムをオンラインで開催するなど、制限の多いなかでも活動できた。国内フィールドワークも実施し海外に渡航できなくても事業の目的にあった活動ができることが確認できた。本校にとって初めてのDP最終試験を実施した。6名受験し5名がDPを取得できた。6名のスコア平均も31点と世界平均を上回る結果となった。一方でIB運営にともなう組織の改編などで教員の負担感は増大しており、働き方改革をスピード感をもって進める必要がある。変形労働時間制のルールにもとづく適切な勤務管理の在り方を早急に整備する必要がある。働きやすい職場環境の整備が喫緊の課題である。</p>		

3 重点目標達成についての総括的評価

WWL 事業最終年度であったが、新型コロナウイルス感染拡大により、活動は大幅な制約を受けることになった。そのような状況であったが、国内フィールドワークの実施、国際シンポジウムの開催などについて成果をあげることができた。また、IBDP 二期生も世界平均を超える成績を修めた。生徒募集についても、本校の教育がメディアの注目を集めたこともあって、志願者を増加させることができた。一方、職員の勤務時間短縮、勤務カレンダーによる適切な勤務管理は十分に行うことができなかった。前年度と比較してストレスチェックの数値は大幅に改善したが、働きやすい職場環境の醸成は端緒についたばかりであり、引き続き重要な課題として取り組んでいく。

4 令和4年度の学校課題

- ・ WWL 事業の次の事業への取り組み方。
- ・ IB 校としての認定を受けること。
- ・ コロナ禍においても可能な校外フィールドワークの実践。
- ・ 勤務カレンダーを適切に運用すること。
- ・ 未来志向の将来ビジョンを構築すること。
- ・ 教職員の主体的な研修・研究を促すこと。
- ・ 働きやすい職場環境づくりを目指すこと。

5 学校課題に向けての具体的な取り組み

- ・ 国の教育研究開発に積極的に関わること。
- ・ 9月に行われる IBO 査察に適切に対応すること。
- ・ 2年次校外学習、オーストラリア校外学習、アジア学院校外学習を適切に実施すること。
- ・ クラウド型勤怠管理システム「勤怠先生」を積極的に活用すること。
- ・ これまでの教育実践を深化させることのできる将来構想計画を立てること。
- ・ 研修情報の周知、予算面のサポートをすすめ研修参加を奨励すること。
- ・ 職員室の機能強化を図ること。

6 成果物一覧（出版物・紀要・書籍等）

- ・ 第2回 WWL 研究大会 第24回総合学科研究大会資料集
- ・ WWL（ワールド・ワイド・ラーニング）コンソーシアム構築支援事業 最終報告書
- ・ 筑波大学附属坂戸高等学校 研究紀要 第58集

学校評価（自己評価）報告書（項目別表）

令和 3 年度

学校名

筑波大学附属坂戸高等学校

項番	評価項目	具体的評価結果
1-1-3	体験的な学習や問題解決的な学習、児童生徒の興味・関心を生かした自主的・自発的な学習の状況	令和3年度もコロナ禍の学校運営となった。人と人との接触が著しく制限される中で、本校が目指す、体験的な活動は大きく制限を受けた。そのような中でも、専門教科の授業などについては、分散登校時の時間割等を工夫し、体験的な学習ができるよう配慮した。
1-1-7	コンピュータや情報通信ネットワークを効果的に活用した授業の状況	生徒全員に自身でデバイスを用意してもらい、BYODを導入し3年目となった。校内のいずれの場所でもWIFIがつながる環境も構築できている。システム障害もなく運用できている。多くの授業でデバイスの積極的な活用が見られる。
1-2-1	学校の教育課程の編成・実施の考え方についての教職員間の共通理解の状況	1～2ヶ月に1回の継続した研修を実施することができた。本校のカリキュラムの構成について全教員で理解を深めることができた。
1-2-3	児童生徒の学習について観点別学習状況の評価や評定などの状況	教育課程検討委員会を中心に評価に関するあり方を検討することができた。すべての教科で評価の観点を生徒に示すことができている。観点も三観点をしっかり明記することができている。
1-2-5	体験活動、学校行事などの管理・実施体制の状況	コロナ禍での実施で多くの行事は縮小、中止となった。実施できた行事についても生徒の安全・安心を第一優先として運営することができた。
2-1-1	進路指導	オンライン授業も多かったが、担任を中心に生徒のフォローアップに努め、概ね例年と変わらない、進路実績をあげることができた。
3-1-1	学校の教職員全体として生徒指導に取り組む体制の整備の状況	支援コーディネーターを中心にケアの必要な生徒について教員間で共有する機会を多くつくった。様々なチャンネルで得られた情報を生徒指導部にあげる体制をつくることができた。
3-1-5	スクールカウンセラーやスクールソーシャルワーカー等との連携協力による教育相談の状況	支援コーディネーターが中心となって適切な連絡調整を進めた結果、学校、SC、SSWとの連携を取ることができた。
4-1-4	児童生徒を対象とする保健（薬物乱用防止、心のケア等を含む）に関する体制整備や指導・相談の実施の状況	保健指導については保健体育を中心に進めてきた。学校行事としては薬物乱用講座を一度実施した。
5-1-99	安全管理	安全衛生委員会を毎月1回開催した。職場巡視での指摘事項をすべて改善することはできていないが、室内の棚などの固定についてはかなり改善することができた。一方、グラウンド等の生徒が利用する施設の老朽化が進み、安全上問題もあるため改善の必要がある。

6-1-4	個別の指導計画や教育支援計画の作成の状況	支援対象の生徒は多く、十分に対応することができていない。効率的な作成、管理の方法について改善する必要がある。
7-1-5	勤務時間管理や職専免研修の承認状況等、服務監督の状況	1年間の変形労働時間制が想定する勤務と教員の働き方は親和性のあるものではないため、どのようにして、勤務実態をそのルールに落とし込むか検討することが必要である。
7-1-6	各種文書や個人情報等の学校が保有する情報の管理の状況、また、教職員への情報の取扱方針の周知の状況	職員室に個人、学年、分掌のロッカーを配置し、書類等は職員室に集約することを進めている。また、学務に利用するパソコンも職員室内だけで運用することを目指し、環境整備を進めている。
10-1-3	児童生徒の個人情報の保護の状況	7-1-6と同様。生徒の個人情報については、職員室で一元管理することを目指し、環境整備を進めている。
11-1-5	P T Aや地域団体との連絡の充実の状況。	P T Aや後援会と良好な関係を継続している。コロナ禍でP T A活動は制限されているが、役員の皆さんをはじめ多くの保護者のみなさんも学校の教育活動に協力をいただいている。
14-1-99	筑波大学の附属学校として	未来志向の学校のあり方について、校内でも議論を進めることができた。